

悲しい「喪中」の知らせ

毎年、この時期になると「喪中」の知らせが届く。郵便ポストから取り出し、エレベーター前で目を通すと、信じられないことが書かれていた。

「本年十月に夫 吉次 が永眠しました」と。吉次とは、信州大時代の同期で、長野県須坂市に住む阪牧吉次さんだ。阪牧（昔から、こう呼んでいた）の奥さまからの「喪中」の知らせに、ただ驚くばかりだった。

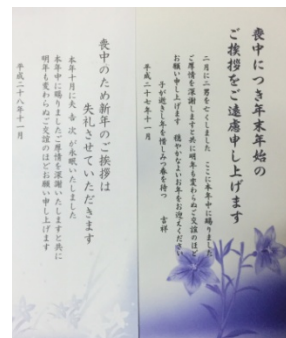
足早に自宅に戻り、去年の年賀状を探した。去年も「喪中」の知らせだったことを思い出した。「二月に二男を亡くしました子が逝きし年を惜しみつ春を待つ 吉祥」と書かれていた。そして、阪牧らしく手書きで「元気でおりますので ご安心ください」と。

それがどうしてこんなことに。阪牧から送ってもらった大著を取り出し、久しぶりにページをめくった。彼の顔が浮かんでくる。目頭があつくなり、読み進むのをやめた。その夜は寝苦しかった。

阪牧は人文学部文学科「日本史学」専攻であった。学科は違っていたが、自治会活動などでの「仲間」。なんだか貫禄・風格があり、頼りになる「兄貴」のような感じだ。思誠寮の「顔」でもあり、阪牧の部屋に行って愚痴をこぼすと、親身になって聴いてくれた。歴史に造詣が深く、部落問題などじつに詳しかった。卒業論文が大著に収められているが、大学時代から驚くほどレベルの高い論文を書いていた。

卒業後は、長らく音信が途絶えていた。10 数年前に阪牧から突然「依頼」があり、須坂市公民館で講演することになった。阪牧が公民館長のときだと思う。須坂の街なみを案内してもらい、講演後には美味しい食事をご馳走になった。どうしても、その日のうちに帰らなくてはならず、心残りだったが別れた。阪牧と直接に顔を合わせたのは、これが最後だった。今から考えると、もっと地域に密着した講演をすべきだったと反省している。阪牧に会って伝えたかったが、もうできない。

その後しばらく年賀状の「やりとり」しかなかったが、数年前に例の大著が送られてきた。それからメールでも連絡を取り合った。私のレポートも読んでくれていたようだ。お世話になった阪牧が、こんなにも早くいなくなるなんて、いまだに想像もつかない。お礼を言い、もっと話したかった。それがもうできないのが、残念で悔しくてならない。



(2016年11月26日)